

中学校教員の性の健康教育に対する意識と課題

島田 友子¹⁾

Recognition and challenges of the junior high school teachers in the field of sexual health education

Tomoko SHIMADA¹⁾

要 旨

本研究では、中学校教員の性の健康教育（以下、性教育とする）に関する意識を明らかにし、今後の性教育実践の課題と方向性について検討することを目的とする。調査方法は、1980年（以下、過去と記す）A県C市の中学校教員を対象に実施された性についての調査を基にして作成した質問紙を用いて、2009年（以下、今回と記す）A県B市の中学校教員に無記名自記式質問紙調査を行い、両年度の結果を対比した。

その結果、性教育は「必要」であると回答した教員は、過去の調査では122名（88.5%）、今回の調査結果では296名（98.6%）で、ほぼ全員が性教育は必要であると回答した（ $p<0.05$ ）。性教育を実施している教員は、過去58名（42.0%）、今回186名（62.2%）で、実践していると回答した教員が増加していた（ $p<0.05$ ）。性教育のイメージをみると、「あたたかな」因子と「柔軟な・解放された」因子が抽出された。性教育のイメージは教員の教育歴や性教育の実施有無、または相談のしやすさとの関連が明らかになった。性教育実践における教員の意識は生徒に影響することが考えられ、今後の性教育の取り組みについて、検討していきたいと考える。

キーワード：性の健康教育 中学校教員 因子分析 性教育のイメージ

Abstract

The purpose of this study is to clarify the junior high school teacher's (JHST) recognition regarding the Health Education on sex (hereafter collectively called "sex education") and to examine the practice task and the direction of future sex education.

In 1980 (hereafter collectively called "past"), survey questionnaire on sex education was carried out targeting junior high school teachers in City C. In 2009 (hereafter collectively called "present"), an anonymous survey questionnaire based on the research in 1980 was carried out, this time targeting junior high school teachers in City B.

This research has compared the both results from the past and the present.

As a result, the number of candidates those who filled out that "sex education is necessary", was 22 (88.5%) in the past, and 296 (98.6%) in present, which shows that there is a change in time that the JHST in present significantly recognize sex education is important compare to the ones in the past. ($p<0.05$).

Furthermore, it appears that 58 (42.0%) of the past and 186 (62.2%) of the present JHST have conducted sex education which showed an increase in numbers ($p<0.05$).

¹⁾ 名桜大学 〒905-8585 沖縄県名護市字為又1220-1 Meio University Faculty of Human Health Sciences Department of Nursing 1220-1 Biimata, Nago City, Okinawa Japan 905-8585

In addition, factors extracted for sex education was the images such as “Warm” and “flexible/open free”. It became clear that image of the sex education is highly related to whether teachers have the experience in implementing sex education and their teaching history or whether they are liable for student consultations.

It is conceivable that the teachers’ manner/ belief/ conscious during sex education practice will have the effect on their students. Given the circumstances, further study is necessary on the efforts of the school based sex education.

Keywords: sexual health education, junior high school teachers, factor analysis, image of the sex education.

I. 緒 言

文部科学省は（文部科学白書，2015年度），学習指導要領において学校における「性に関する指導」の目的は，児童生徒に性に関する知識を理解させるとともに，生命の尊重や自己及び他者の個性を尊重し，相手を思いやり，望ましい人間関係を構築するなど，適切な行動を取ることができるようにすることとしている。指導体制は，体育，保健体育，特別活動，道徳などを中心に学校の教育活動全体を通じて適切に行うものとしている。

学校教育における性教育の現状では，学習指導要領に基づいて「性教育を実施しにくい状況」や「安定した教育活動が行われていない」ことが指摘されている（鹿間，2008）。性教育の必要性は認識されているにもかかわらず計画的・組織的に行われていない学校も存在している。さらに，小川（2015）の研究では，具体的に何をどう教えてよいのか，教員自身に迷いや戸惑いがあることが報告されている。このような状況下で，中学校教員は，性教育に対してどのように取り組んでいるのだろうか。

青少年の性行動全国調査（2014）によると，青少年における性行動の早期化や活発化は減少する傾向が現れている。中学生の場合，デート経験・キス経験において，2005年から2011年の間の経験率の低下は，男子よりも女子において顕著である。また，厚生労働省衛生行政報告例（2014）の十代の人工妊娠中絶件数をみると，2013年に比べて減少傾向を示している。特に各年齢別にみると「20歳未満」では，「19歳」が最も多い件数を示し，次いで「18歳」，「17歳」となっているが，いずれも減少傾向を示している。しかし，「健やか親子21」の最終評価報告書によると（2013），十代の人工妊娠中絶件数については，減少傾向の要因は明らかになっておらず，地域格差もあるため，今後更なる分析が必要であるとしている。また，厚生労働省は（2015），十代の性感染症罹患率について着実に減少している反面，梅毒の報告数等依然として増加傾向にあり，増加していることに注意を喚起している。クラミジア感染の報告では，医療機関におけるデータで増加傾向にあることが報告されており，

留意が必要である。子宮頸がんの発生には，発がん性のヒトパピローマウイルス（human papilloma virus：HPV）の感染が関与しており，初交年齢の低年齢化等により若い女性がHPVに感染する機会の若年化等が考えられている。

このような中で，思春期の性に関する問題は，人工妊娠中絶や性感染症などの問題の改善だけではなく，人間のライフサイクル上の成長発達の健康課題として考えていく必要があり，現状の性教育のあり方を再検討していく必要性が示唆される。

今回，中学校教員の性教育へのアンケート調査に活用したA県C市の中学校の性教育に関する資料は，A県の性教育研修会資料としてC市の中学校に1978年分から保存されていたものである。性教育は1972年（昭和47）には文部省社会教育局長通達によって，純潔教育という呼び方であったのが，2008年には生徒指導における「性に関する指導」に変更するという転換期を迎えている（鹿間 2008，田代 2006）。山本ら（1991）は，1977年には，中学校の学習指導要項の改訂において，性教育を生物学的知識だけでなく全人教育として捉えられるようになったと報告している。つまり，性は否定的，抑圧的に捉える考え方ではなく，一生の流れの中で人間全体のこととして肯定的に捉えられるようになった。そのような新しい性意識に対応するため，学校では研修や研究が行われていた。その当時の教員は，研修を受け，あるいは独学で学習研究を行い，性教育の方向性を模索していたと考えられる。それから約30年の時を経て，中学校教員の性教育への意識はどのように変化しているのだろうか。今回の調査資料は1980年と2008～2009年という古い資料ではあるが，30年という年月の経過の比較を行うことで教育現場の実際を理解できることに繋がると考える。また，中学校教員の性教育の受けとめ方の変化を把握することは，今後の性教育実践への方略に結びつく。今回，中学校教員に対し，性教育に関する意識調査を行い，今後の性教育実践における課題と方向性について検討していきたいと考える。

II. 用語の定義

文部科学省は性教育の用語について、「性教育」、「性の健康教育」、「性に関する教育」、「性に関する指導」などさまざまな用語を用いている。

本研究では、主として「性の健康教育」（表記は性教育とする）の用語、考え方を用いる。性の健康教育とは、WHO の健康の定義と、第17回世界性科学会会議におけるモントリオール宣言（2005）に基づいて定義されており、文部科学省においても一時期用いられている。性の健康（Sexual health）とは、性に関して身体的、情緒的、精神的そして社会的に良好な状態であり、健全な心身（wellness）と幸福（well-being）の達成や持続可能な開発の実現における中心的課題であり、個人的・社会的責任と平等な社会的交流を育みつつ、教育推進することを性の健康教育としている。

文部科学省は、1999年に「学校における性教育の考え方、進め方」という指導資料を発行しており、これは現在の日本の性教育の土台となる基軸認識である（広瀬2013）。基軸である「性教育」は、二次性徴、受精や妊娠などの内容についての教育といった狭い概念で捉えられていた。そのため、文部科学省では狭義の内容に加えて、性行動を回避する態度や望ましい人間関係を築く能力を育てる広義の内容を含むものとして、「性に関する教育」という名称を用いてきた。2002年には、国会論議で性教育教材批判があり、中央教育審議会初等中等教育部の教育課程部会内に設けられていた「健やかな体を育む教育の在り方に関する専門部会」で性教育の見直し作業が行われた（広瀬、2013）。文部科学省は、2008年度からは「性教育」を「性に関する指導」という名称に変更した経緯がある。

III. 研究目的

中学校教員の性教育に関する意識を明らかにし、今後の性教育実践の課題と方向性について検討する。

IV. 研究方法

1. 調査期間と対象

調査期間は2008年10月から2009年1月。対象は、A県B市の中学校教員367名と1980年のA県C市の中学校教員138名。1980年のアンケート調査結果資料は、C市中学校校長から過去の調査の活用を依頼された資料である。

2. 調査、分析方法

無記名自記式質問紙調査、時系列調査。質問紙は、1980年にA県C市の中学校で行われた性についての質問

紙調査項目や回答選択肢を参考にして作成した。設問の内容は対象者の属性、性教育の必要性和実施状況、性に関する相談の有無と相談回数、性教育の知識の有無と情報収集の方法、性という言葉に対する意識、研修会の必要性の有無に関するものであった。A県B市の中学校教員に対して、無記名自記式質問紙調査を行い、留め置き法にて実施した。1980年のA県C市の中学校の調査結果と2009年のA県B市の中学校教員へ実施した調査結果を対比した。結果には、過去（1980年度）と今回（2008年～2009年）という言葉を用いて示している。また心理学的手段としては、中間（2002）の意味微分法（semantic differential method : SD）法を用いて性教育のイメージに関する分析を試みた。SD法は10項目の形容詞対からなり、7段階の評定尺度を設定し回答を求め主成分分析バリマックス回転による因子分析を行った。各質問の回答率の比較にはクロス集計（ χ^2 検定）、平均値の差の検定（t検定）を行い有意水準は5%未満とし、解析にはSPSS16.0 j for Windows を用いた。

3. 倫理的配慮

研究に先立ち研究の目的、概要、回答は自由であること、プライバシーの保護、データ管理は厳重に行うこと等の倫理的配慮をA県B市の中学校校長会で説明し、承認を得て行った。校長会の承諾を得て、中学校教員に説明を明記した研究協力依頼文を調査票とともに配布した。調査票に回答することをもって、協力への同意とした。調査で得た個人的データは、厳重に保管し匿名性を保持できるように記号化しデータ処理を行った。研究の終了後のデータは、個人情報外部に漏れないようにしたうえで廃棄する。また、1980年の性教育に関するアンケート調査資料は、A県C市の中学校校長に使用承諾を得た。アンケート調査資料は研究開始以前から存在する既存資料であり、個人情報が保護されていること及び非人道的な質問・調査がないことを確認して用いた。

V. 研究結果

1) 対象者の属性

A県B市の中学校教員367名を対象とし、301名の有効回答（回収率・有効回答率82.0%）を得た。対象者の属性を表1に示した。301名の教員の内訳は、男性128名（42.5%）、女性173名（57.5%）であり、担任176名（58.5%）、教科担任95名（31.6%）、養護教諭26名（8.6%）、その他であった。平均教育歴は、19.8±9.2年であり、最高38年、最小0年の経験年数であった。また、過去のアンケート調査には138名が回答しており、男性101名（73.2%）、女性37名（26.8%）であった。質問項目は次の8項目であった。①性教育は必要だと思うか②主に誰

が指導すべきだと思うか③性教育をしているか④生徒から性の問題について相談を受けたことがあるか⑤あなたが性教育の指導者としての立場になった時、自分の性知識をどう思うか⑥性の知識はどのような方法で得られたか⑦「性」とか「セックス」という言葉を使ったり聞いたりすることをどう思うか⑧性教育の研修会が必要か。その結果について表2に示した。

表1. 対象の属性

		今回調査(n=301)	1980年調査(n=138)
性 別	男 性	128人(42.5%)	101人(73.2%)
	女 性	173人(57.5%)	37人(26.8%)
教育歴		19.8±9.2	
役 職 担 任		176(58.3%)	—
	養護教諭	26(8.6%)	—
	教科担任	95(31.5%)	—
	その他	37(12.3%)	—

表2. アンケート調査結果

質 問	項 目	1980年調査結果						2008～2009年調査結果					
		男		女		計		男		女		計	
		n	(%)	n	(%)	n	(%)	n	(%)	n	(%)	n	(%)
		101人	73.2%	37人	26.8%	138人	100%	128人	42.5%	173人	57.5%	301人	100%
①性教育は必要だと思うか	必 要 と 思 う	87	86.2	35	94.6	122	88.5	123	96.1	169	97.7	296	98.6*
	必 要 で な い	8	7.9	1	2.7	9	6.5	0	0.0	0	0.0	0	0.0
	わ か ら な い	6	5.9	1	2.7	7	5.0	3	2.4	1	0.6	4	1.4
②主に誰が指導すべきだと思うか	担 任	37	36.6	16	43.2	53	38.4	77	60.2	107	61.8	184	61.1
	養 護 教 諭	37	36.6	9	24.3	46	33.3	60	46.9	90	52.0	150	49.8
	教 科 担 任 (保 体)	31	30.7	18	48.6	49	35.5	16	12.5	17	9.8	33	11.0
	保 護 者	47	46.5	21	56.7	68	49.2	38	29.7	63	36.4	101	33.6
	そ の 他	5	5.0	1	2.7	6	4.3	11	8.6	18	10.4	29	9.6
	< し て い る >	42	41.6	16	43.2	58	42.0	73	57.5*	113	65.7*	186	62.2
	保 健 指 導 (授 業)	12	11.9	7	19.0	19	13.7	47	36.7	59	34.1	106	35.2
③性教育をしているか	学活・ホームルーム	6	6.0	1	2.7	7	5.0	5	4.0	11	6.4	16	5.3
	折 に ふ れ て	24	23.8	11	29.7	35	25.3	34	26.6*	83	48.0*	117	38.9
	そ の 他	1	1.0	1	2.7	2	1.4	1	0.8	6	3.5	7	2.3
	< し て い な い >	59	58.4	21	56.7	80	57.9	54	42.5	59	34.3	113	37.8
	必 要 が な い	4	4.0	0	0.0	4	2.8	1	0.8	2	1.2	3	1.0
	時 間 が な い	3	3.0	5	13.5	8	5.7	7	5.5	17	9.8	24	8.0
	自 信 が な く で き な い	19	18.8	8	21.6	27	19.5	13	10.2	15	8.7	28	9.3
	今 後 し た い	11	10.9	6	16.2	17	12.3	8	6.3	20	11.6	28	9.3
	年 間 計 画 が な い	14	13.9	1	2.7	15	10.8	11	8.6	11	6.4	22	7.3
	そ の 他	9	8.9	3	8.1	12	8.6	25	19.5	28	16.2	53	17.6
④生徒から性の問題について相談を受けたことがあるか	な い	86	86.1	25	67.5	110	81.2	93	72.7*	102	59.0*	195	64.8
	あ る	14	13.9	12	32.5	26	18.8	34	26.6*	65	37.6*	99	32.9
	あ る 1 回	1	0.9	1	2.7	2	1.4	5	3.9	2	1.2	7	2.3
	2 ～ 3 回	6	5.9	3	8.1	9	6.5	12	9.3	20	11.6	32	10.6
	4 ～ 5 回	5	4.9	5	13.5	10	7.2	7	5.5	14	8.1	21	7.0
	6 ～ 10 回	1	0.9	—	—	1	0.7	3	2.3	3	1.7	6	2.0
⑤性教育の指導者の立場になった時、自分の性知識をどう思うか	10回以上	1	0.9	3	8.1	4	2.8	4	3.1	17	9.8	21	7.0
	十 分 理 解 し て い る	14	13.9	2	5.5	16	11.6	4	3.1	6	3.5	10	3.3
	だ い た い 知 っ て い る	44	43.6	16	43.2	60	43.4	44	34.3	59	34.1	103	34.2
	だ い た い 知 っ て い る が 不 安	36	35.6	16	43.2	52	37.6	69	54.0	94	54.3	163	54.2
	ほ と ん ど 知 ら な い	7	6.9	3	8.1	10	7.4	6	4.7	6	3.5	12	4.0
	学 校 教 育	11	10.8	2	5.4	13	9.4	71	55.5	84	48.6	155	51.5
⑥性の知識はどのような方法で得られたか	研 究 会	4	3.9	2	5.4	6	4.3	24	18.8	54	31.2	78	25.9
	講 演 会 ・ 講 話	13	12.8	6	16.2	19	13.7	54	42.2	98	56.6	152	50.5
	医 学 書 ・ 専 門 書	61	60.3	18	48.6	79	57.2	30	23.4	59	34.1	89	29.6
	新 聞 ・ 雑 誌	36	35.6	14	37.8	50	36.2	44	34.3	49	28.3	93	30.9
	ラ ジ オ ・ テ レ ビ ・ 映 画	17	16.8	6	16.2	23	16.6	23	18.0	32	18.5	55	18.3
	そ の 他	20	19.8	3	8.1	23	16.6	9	7.0	7	4.0	16	5.3
⑦「性」、「セックス」という言葉を使ったり聞いたりすることをどう思うか	何 と な く い や ら し い	8	7.9	2	5.4	10	7.2	4	3.1	2	1.6	6	2.0
	何 と な く は ず か し い	28	27.7	15	40.6	43	31.1	70	54.7	72	41.6	142	47.2
	何 と も 思 わ な い	54	53.6	16	43.2	70	50.8	47	36.7	82	47.4	129	47.9
	そ の 他	11	10.8	4	10.8	15	10.9	7	5.5	18	10.4	25	8.3
⑧性教育の研修会が必要か	必 要 と 思 う	88	87.3	33	89.2	121	87.7	123	96.1	166	96.0	289	97.0
	必 要 で は な い	11	10.8	4	10.8	15	10.9	2	1.6	3	1.7	5	1.7
	そ の 他	2	1.9	—	—	2	4.0	3	2.3	1	5.8	4	2.3

* P<0.05

2) 性教育の必要性の有無

今回の調査では、「性教育は必要だと思うか」という質問について「必要」と回答したのは296名(98.6%)。過去の調査では122名(88.5%)であり、今回の調査結果の方が「性教育は必要だ」と回答した割合は高かった($p<0.05$)。

3) 性教育の実施状況

今回の調査では、「主に誰が性に関する指導すべきだと思いますか」の質問には、「担任」184名(61.1%)、「養護教諭」150名(49.8%)、「教科担任」33名(11.0%)、「保護者」101名(33.6%)の順であった(複数回答)。過去の調査では「保護者」68名(49.2%)、「担任」53名(38.4%)、「教科担任(保体)」49名(35.5%)、「養護教諭」46名(33.3%)の順であった(複数回答)。

「性教育を実際に行っていますか」の質問については、「している」186名(62.2%)、「していない」113名(37.8%)であった。過去の調査では性教育を「している」58名(42.0%)、「していない」80名(57.9%)であり、今回性教育を「している」者の割合が高かった。男女別でみると、過去の調査では男性42名(41.6%)で女性16名(43.2%)が実施していた。一方、今回の調査を男女別でみると、女性113名(65.7%)、男性73名(57.5%)で女性の方が実施している割合が有意に高かった($p<0.05$)。また、今回、性教育を「している」者は教育歴16~20年が33.3%と最も高率を示した($p<0.01$)。

性教育をどのような場面で行っているかについての今回の調査結果では「折にふれて」117名(38.9%)、「授業でおこなっている」106名(35.2%)、「学活・ホームルームを使って」16名(5.3%)、「その他」7名(2.3%)であった。女性は「折にふれて」83名(48.0%)性教育を実施しており、男性の回答34名(26.6%)と有意差が認められた($p<0.05$)。過去の調査では「折にふれて」35名(25.3%)、「授業で行っている」19名(13.7%)、「学活・ホームルームを使って」7名(5.0%)、「その他」2名(1.4%)であった。

「性教育を実際に行っていない」と回答した人の理由をみると、過去の調査では「自信がなくてできない」が27名(19.5%)で最も多く、次いで「年間計画がない」15名(10.8%)、「時間がない」8名(5.7%)であった。今回の調査でも過去の調査と同様に「自信がなくてできない」28名(9.3%)が最も多い結果を示した。ただし、過去の調査結果と比較すると、今回の調査では「自信がない」と回答した者は10ポイント低くなっている。次いで「時間がない」8.0%、「年間計画がない」7.3%の順であった。過去の調査と比較して今回の調査では、「時間がない」という理由が高い割合を示した。また、今回の調査で「自信がない」と回答した者は、教育歴5年未満と25年以上

の教師が多かったが有意な差は認められなかった。

4) 生徒からの相談の有無について

性の問題について、生徒からの相談の有無を尋ねる質問項目には、今回99名(32.9%)の教員が生徒から相談を受けていると回答した。過去の調査結果は26名(18.8%)であり、今回の調査結果は過去と比較して、約2倍の増加を示した。「相談を受けたことがある」者は教育歴16~20年の教員が30.6%と最も多かった。また、「相談を受けたことがある」のは女性65名(37.6%)、男性34名(26.6%)で女性の方が多く有意差が認められた($p<0.05$)。今回の調査では、相談回数は、「2~3回」と回答した人が一番多く32名(10.6%)、次いで「4~5回」と「10回以上」が21名(同率で7.0%)、「1回」7名(2.3%)、「6~10回」6名(2.0%)であった。過去の調査結果と比較して相談回数はいずれも増加している。特に今回の調査で10回以上の相談回数があると回答した者は、過去の調査結果と比較して2倍以上の増加率を示した。

5) 性教育の知識の有無と情報収集の方法

「自分自身の性知識についてはどう思いますか」の質問には、今回の調査結果は、「十分理解している」10名(3.3%)、「だいたい知っている」103名(34.2%)、「知っているが不安」163名(54.2%)、「ほとんど知らない」12名(4.0%)であった。過去1980年の調査では、「十分理解している」16名(11.6%)、「だいたい知っている」60名(43.4%)、「知っているが不安」52名(37.6%)、「ほとんど知らない」10名(7.4%)であり、知っていると回答した者は過去の調査の方が多い結果であった。「ほとんど知らない」と回答した者は、今回の調査の方が、過去と比較して減少していた。

性の知識の情報収集は、今回の調査では「学校教育」で得たと回答した者が155名(51.5%)で最も多かった。1980年の9.4%から42.1ポイント高かった。講演会・講話は152名(50.5%)で過去の調査結果の19名(13.7%)から36.8ポイント高く、研究会にて78名(25.9%)、医学書・専門書89名(29.6%)、新聞・雑誌93名(30.9%)、ラジオ・TV・映画55名(18.3%)であった。過去の調査では、講演会・講話、研究会、ラジオ・TV・映画のいずれの知識取得方法も今回の調査と比較して性の知識の情報収集は低かった。しかし、医学書・専門書は79名(57.2%)、新聞・雑誌は50名(36.2%)であり、過去の方が医学書・専門書や新聞・雑誌からの情報収集が高い割合を示した。

6) 研修の必要性について

「性教育の研修は必要だと思いますか」には今回の調査では、「必要」と答えた者は289名(97.0%)で多数を

占め、過去の調査結果121名（87.7％）から8.3ポイント高かった。「必要でない」は今回4名（1.7％）であったのに対して過去の調査では、15名（10.9％）と必要ではないという回答が高い割合を示した。

7) 性に関する考えや性のイメージの内容

「性」や「セックス」という言葉を使ったり聞いたりすることに対してどう思うかの質問については、今回の調査では「なんとも思わない」が129名（47.9％）で一番多かった。次に、0.7ポイント差で「なんとなく恥ずかしい」142名（47.2％）で、その次に、「なんとなくいやらしい」6名（2.0％）、その他25名（8.3％）であった。過去の調査は、今回の調査結果と同じ順序の結果であり、「なんとも思わない」が70名（50.8％）で一番多かった。「なんとなく恥ずかしい」が43名（31.1％）であり、今回の調査結果と比較すると16.1ポイント低い結果を示した。

8) 性教育に対するイメージについて

10対の形容詞は「明るいー暗い」「美しいーみにくい」「暖かいー冷たい」「豊かなー乏しい」「のどかなー緊迫した」「上品なー下品な」「解放されたー抑圧された」「柔かいー堅い」「軽やかなー重々しい」「好きー嫌い」であり、この10対の形容詞を今回の調査では用いた。10対の形容詞の平均得点及びSDスコアは「明るい」 4.92 ± 1.21 、「美しい」 4.96 ± 1.05 、「好き」 4.42 ± 0.97 、「上品な」 4.22 ± 0.75 、「重々しい」 4.17 ± 1.06 、「堅い」 3.99 ± 1.09 、「抑

圧された」 3.98 ± 1.04 、「乏しい」 3.17 ± 1.27 、「緊迫した」 3.17 ± 1.14 、「冷たい」 2.94 ± 1.04 、であった。10対の形容詞によるSD尺度を用いて因子分析を行った。結果からは2因子が得られた（表3）。第1因子は「あたたかな」因子（ $\alpha = 0.81$ ）、第2因子は「柔軟な・解放された」因子（ $\alpha = 0.77$ ）で、Cronbach α 係数で求めたところどちらも0.70以上であり内部一貫性が認められた。各因子群の平均得点及び標準偏差は、第1因子・ 24.66 ± 2.51 、第2因子・ 16.12 ± 3.32 であった。2因子の平均得点を用いて分析し有意差が認められたのは「性教育の実施有無」、「子ども達の相談の有無」、「教育歴」であった（表4）。表4に示すように、相談を受けると回答した教員と性教育を実施していると回答した教員の第1因子の平均得点は、 29.33 ± 4.7 と 28.86 ± 4.7 となり、「相談なし」や「性教育はしていない」と回答した教員よりも有意に得点が高かった（ $p < 0.02, 0.05$ ）。第2因子の平均得点は、相談を受けたことがある 18.52 ± 2.6 、相談を受けたことがない教員 14.03 ± 2.3 となり、また性教育を実施している 16.90 ± 2.5 、性教育はしていない教員 12.88 ± 2.2 と、相談を受けたことがある教員、性教育を実施している教員の得点がそれぞれ高く、有意差を認めた（ $p < 0.02, 0.01$ ）。教育歴において、第2因子の平均得点は教育年数の長い教師に比べ教育年数の短い教員の方が高いという結果であった（ $p < 0.01$ ）。第1因子の教育歴による因子得点の有意差は認められなかった。

表3. 「性教育」イメージの因子分析

	第1因子	第2因子
＜あたたかな因子＞		
美しいーみにくい	0.800	0.077
あたたかいー冷たい	0.757	0.086
明るいー暗い	0.752	0.127
豊かなー乏しい	0.686	0.282
好きー嫌い	0.641	0.225
上品なー下品な	0.435	0.345
(6項目 $\alpha = 0.810$)		
＜柔軟な・解放された因子＞		
開放されたー抑圧された	0.060	0.843
やわらかいー堅い	0.179	0.826
軽やかー重々しい	0.168	0.802
のどかなー緊迫した	0.322	0.450
(4項目 $\alpha = 0.766$)		
累積寄与率	39.67	55.02

表 4. 因子分析と教育歴・実施の有無・相談の有無との関連

			n	平均値±SD	F値	有意確率
あたたかな因子	第一因子	性教育している	181	28.86±4.7	3.598	0.05
		性教育していない	108	27.82±4.2		
		相談あり	98	29.33±4.7		
		相談なし	187	28.02±4.4	3.307	0.02
		教育歴				
		0～5年	33	24.61±2.7		
		6～10年	21	24.19±2.4		
		11～15年	20	25.10±2.5		
		16～20年	74	24.28±2.6		
		21～25年	45	24.89±2.4		
		26～30年	70	25.28±2.8		
		31年以上	18	24.65±2.5		

			n	平均値±SD	F値	有意確率
柔軟な・解放された因子	第二因子	性教育している	186	16.90±2.5	9.642	0.01
		性教育していない	113	12.88±2.2		
		相談あり	100	18.52±2.6	9.789	0.02
		相談なし	195	14.03±2.3		
		教育歴				
		0～5年	33	18.24±2.8		
		6～10年	21	16.68±2.7		
		11～15年	20	16.76±3.2	4.347	0.01
		16～20年	74	15.82±2.8		
		21～25年	45	15.73±2.3		
		26～30年	70	15.80±3.7		
		31年以上	18	14.22±3.9		

VI. 考 察

性教育は、その時代背景にある教育改革の流れや、社会における学校教育への期待などの影響を受けてきた（鹿間，2008）。1980年代は文部省社会教育局長通達によって、純潔教育という呼び方を「生徒指導における性に関する指導」に変えるという大きな転換期であったが、学校での教育は純潔教育の域をなかなか出なかったと報告されている（鹿間 2008，田代 2006）。純潔教育とは、特に女性が婚前交渉を避ける指導を示しており、現在はこの明らかに男女不平等な純潔教育からは、性教育は脱出しているといえる。しかし、いまだに性教育の教育方法については戸惑いがあることが報告されている。

過去の調査で「性教育は必要だと思うか」に回答した教員は88.5%を示しており、性教育を学ぶことの必要性は十分理解していると推察できた。今回の調査では過

去の調査結果と比較して98.6%と10ポイントの増加があり、ほぼ全員が性教育は必要であると答えていた。時代推移からみた中学校教員の性教育に関する認識、今後の性教育実践における課題と方向性について考察する。

1. 質問紙調査の時代推移からみた中学校教員の性教育に関する認識について

「主に誰が性に関する指導すべきだと思いますか」の回答は、過去の調査では保護者に回答した者が多く、5割を示した。今回の調査では、担任と回答した者が6割以上を示し（61.1%）、保護者と回答した者は3割であった。槌谷ら（2009）が指摘するように、教員は、性教育を実施する適任者として保護者をあげていることは、性教育は教員の役割ではなく親の任務だとみなしており、家庭教育に依存的である傾向がうかがえた。しかし、現在は、文部科学省が学校における性に関する指導について（学習指導要領に基づいて）述べているように、性教育は学校教育であり、家庭・地域との連携を推進し保護

者や地域の理解を得ながら学習をすすめることが重要となっている。石沢（2004）は、家庭で性に関する話をするかについて調査した結果、あまり話さない家庭が7割以上であったと報告しており、性教育を家庭で担う意識は薄いことを明らかにしている。つまり、過去の結果とは反対に、保護者は学校へ依存していることが伺える。今後は、保護者と学校側とが相互に連携して子どもに向き合えるようなサポート体制が求められる。

「性教育を実際に行っていますか」の質問については、「している」と答えた者が過去の調査よりも今回の調査結果の方が20ポイント高い結果となり、取り組みの変化の大きさに注目したい。「性教育をしている」者は教育歴16～20年が最も高率であることが明らかになった。小川（2004）は、20・30歳代の若い教員が生徒からの相談をよく受けて性教育を実施している現状を明らかにしているが、本研究の調査では30歳後半から40歳前半の教員の積極的な取り組みが窺えた。この時期の教員は中堅層であり、学校内において責任あるポジションに就き始め経験も豊富になってくる。性教育への積極的な取り組みは、子どもの成長に向き合う教員の力量であるともいえるのではないだろうか。性教育に取り組んでいる男女を比較してみると、女性の方が積極的に性教育に取り組んでいることが示唆された。この結果は、女性の方が性に関する相談を受けやすく、折にふれて生徒達に細やかにかかわって有効な相談に結びついているのでないかと考える。大東（2004）らは、生徒と教員の日々の関係性の重要性を報告しており、高橋（2007）は、何気ない会話が生徒の存在価値を認め、自己肯定感を高めることにつながっていると述べている。つまり、なかなか人に相談しにくいテーマでも、折にふれて声をかける日々の教員の行動は、生徒にとって思い切って相談してみようと思える存在につながり、何気ない会話を通して相談の解決の糸口が見出される。そうして、生徒自身は、自分自身に気づき自己を大切にしていこうという、自己肯定感が高まるのではないだろうか。

今回、「性教育を実際に行っていない」と回答した者の理由をみると、「自信がなくできない」が最も多い回答であったが、過去の調査と比較して「自信がない」と答えた者は少なくなっている。しかしながら「対応に自信がない」、「積極的に成れない」、「どう説明するか迷う」などの戸惑いは依然として払拭されず、個人差があり（岡本 2014）、教育の現状では教員の様々な思いが交錯していると考えられる。反対に、今回の調査では、「時間が無い」という理由が高い割合を示しており、教員の多忙化がわかる状況といえる。渡会（2003）や木村ら（2003）は、教員の多くは性教育の時間が十分取れないことで悩んだり、指導の困難感や他の業務の忙しさを報告しており、時間を確保する困難さや、生徒たちに向き合う時間

を作れずにジレンマを感じていることが考えられる。

性についての情報収集は、今回の調査では「学校教育」で得たと回答した者が51.5%（155名）で最も多く、過去の調査結果の9.4%（13名）から42.1ポイント高かったことは、現在の学校教育の、性教育の享受率の高さが推察できる。柳園（2014）は大学生への調査結果において、性教育受講記憶がある者は全学年で100.0%近くを占めており、過去と比較すると現在の性教育の取り組みが前進していることが窺える。

性の問題について、「生徒からの相談」は、過去（1980年）と比較して約2倍の増加を示した。つまり、現在の教員は生徒への対応は柔軟であり、生徒は日ごろ教員を身近に感じていることが示唆された。また、今回の調査で10回以上の相談回数があると回答した者が多かったことは、相談を重ねるごとに信頼関係が構築され、相談は役立っていたと考えられる。

「自分自身の性知識について」は、「だいたい知っている」と回答した者は過去の調査の方が多い結果であった。また、性の知識の情報収集は、今回の調査では「学校教育」や「講演会・講話」で得たと回答した者が多かったが、過去の調査結果では、医学書・専門書や新聞・雑誌が高い割合を示した。インターネットなど未発達時代に教員は、医学書・専門書や新聞・雑誌から学習を深め、生徒へ正しい知識や情報を教授するために努力していたことが考えられる。

2. 今後の性教育実践における課題

性教育のイメージでは、「明るく」、「あたたかく」、「柔軟で開放的な」イメージが抽出された。また、教育年数の短い教員の方が性教育に対して「柔軟で開放的な」イメージ得点が高かった。「明るく」、「あたたかく」、「柔軟で開放的な」イメージ得点の高い者は、性教育について抵抗が少なく、性教育を「実施している」とことや「生徒からの相談」を受けやすいことにより、教員の性教育に対するイメージや認識は生徒に少なからず好影響を与えていると考えられる。高橋（1999）は、コミュニケーションは、ノンバーバル（非言語的）なコミュニケーションが人間関係を支配していて、ノンバーバルな領域とは、その人の表情や眼つき、姿勢や服装、あるいは声や態度であると述べている。つまり、生徒は教員が性教育へ戸惑いや苦手意識などを感じていると察した場合、その意識は生徒へと伝わっていくと考えられる。一方、教員自身が醸し出す「明るく」、「あたたかく」、「柔軟で開放的な」雰囲気（態度）は、生徒の性教育への抵抗感を軽減させるという点で効果があり、ひいては自分自身を大切にする教育であるという理解にも繋がっていくのではないだろうか。本研究の調査では30歳後半から40歳前半の教員の積極的な取り組みが示唆されたことと、教育年数の短

い教員は「明るく」、「あたたかく」、「柔軟で開放的な」性教育イメージをもっていることを合わせて考えると、教育年数の短い教員から中堅層にあたる教員の性教育に対するポジティブな姿勢は、生徒が性教育を抵抗なく学ぶ基盤を提供することに繋がると考えられる。次世代を育む生徒にとってそのような学習環境基盤は重要であるといえる。

次に、藤田（2007）は専門家の学校への導入や地域との連携の必要性を報告し、曹（2006）や上田（2008）は生徒の学習ニーズや関心、発達段階に応じた知識や情報をいかに提供すべきかが重要であると述べており、学校教育における年間計画や教育プログラムの工夫は課題である。橋本（2011）は性教育の年間計画を作成することで時間確保の対応につながることを報告している。2008年より新学習指導要領が提示され性教育については、「道徳の時間」あるいは全教科で取り上げるようになってはいるが、ミニマム・スタンダード（最低基準）が決まっているわけではなく組織的、計画的に実施されるために必要な「年間計画」がない学校も認められ、個々の教員の対応に任せて性教育の時間を確保することにつながっていないと考えられる。今回の調査では、「年間計画」がないと回答した者は過去の結果より低かったが、性教育の年間計画を作成することで「時間がない」とする教員のジレンマは払拭されることが期待される。

性教育の年間計画を作成する際や実施する際は、学校の外部との連携が必要となってくる。岡本（2014）は、外部講師による講話やピアエディケーションの効果が学校教育に良い影響を与えることを報告している。ピアエデュケーション（仲間教育）とは、テーマについて「正しい知識・スキル・行動を共有し合うこと」（JPCA EA 定義：日本ピアカウンセリング・ピアエデュケーション研究会）であり、いかに興味関心をもってもらおうかという視点で仲間教育を工夫して、相手の心に響く活動を提供していく。性教育は、外部講師やピアエディケーションの介入とを合わせて年間計画へ組み込むことが有効な方法のひとつであるといえよう。

学校における性教育は、児童生徒に性に関する知識を理解させるとともに、生命の尊重や自己及び他者の個性を尊重し、相手を思いやり、望ましい人間関係を構築するなど、適切な行動を取ることができるようにすることを目的としている。教員は、生徒個々の発達の段階を踏まえることはもちろんのこと、保護者の理解を得ながら、保護者や地域、外部講師やピアエディケーターなどとの連携を密にして取り組んでいくことが求められる。

VII. まとめ

1. 性教育は「必要」と回答した教員は過去の調査結果では88.5%，今回98.3%で，過去と今回の調査ともに，ほぼ全員が性教育は必要であると回答した。
2. 過去と今回の調査の比較では，性教育を実施していると回答した教員は，過去の調査結果42.0%，今回の調査結果は62.2%で，今回の方が高い割合を示した。
3. 因子分析の結果，2因子（「あたたかな」因子・「柔軟な・解放された」因子）が抽出された。2因子と「教育歴」「性教育の実施有無」「子ども達の相談の有無」間に関連が示唆された。
4. 教師に相談できるかどうかは信頼関係が築けているかどうか大きな鍵であり，教員自身の相談しやすい「明るく」、「あたたかく」、「柔軟で開放的」な姿勢や，生徒が相談しやすい環境づくりへの，教員の積極的な取り組みが求められる。
5. 性教育の年間計画を作成することは，「時間がない」とする教員のジレンマの解決に繋がり，外部講師やピアエディケーションの介入とを合わせて年間計画へ組み込むことは有効な性教育の方法のひとつであるといえよう。

尚，本稿の一部は第25回日本思春期学会に於いて，発表した。

文 献

- 中間岳，本間俊介，富士川計吉（2002）：「バイオリンの音色に関する研究 高速フーリエ（FFT）法および意味微分法（SD）法による試み」，『認知科学研究』，1-20.
- 橋本紀子，篠原久枝，田代美江子他（2011）：「日本の中学校における性教育の現状と課題」，『女子栄養大学教育学研究室紀要』Vol.9，3-20.
- 広瀬裕子（2013）：学校の性教育に対する近年日本における批判動向―「性教育バッシング」に対する政府対応―，専修大学社会科学年報第48号，193-211.
- 石沢敦子（2004）：思春期における子どもの性教育のあり方（その1）―中学校3年生の家庭における性教育の現状と課題―，群馬パース学園短期大学紀要6（1），3-11.
- 木村あゆみ（2003）：「札幌市内3区の中学校教師の性感染症教育に対する意識調査」，『看護総合科学研究誌』，vol.6，No3，3-13.
- 日本性教育協会編（2014）：『「若者の性」白書―第7回青少年の性行動全国調査報告―』，小学館.
- 文部科学省平成27年度 文部科学白書
www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/.../1375335_010.pdf

2016. 9.1閲覧

- 大東千晃, 西海ひとみ, 水畑喜代子他 (2004):「高校生の性行動, および性教育に対する態度, 関心, 悩み, についての検討 (第1報)」, 『思春期学雑誌』, Vol.22, No3, 131-141.
- 岡本麻代, 斎藤佳余子, 永山いく子 (2014), 「性教育をめぐる高等学校教諭の意識の検討」, 『日本母性衛生学会誌』, Vol.54, No4, 548-555.
- 小川久貴子他 (2004):「思春期の性教育に関する教員の意識調査ー静岡県A町公立中学校においてー」, 『ウィメンズヘルスサイエンス』, Vol. 3, 53-61.
- 小川 真由子 (2015): 小学校で行われる性教育の現状と課題 / 外部講師の性教育に対する教職員のアンケートからの考察, 鈴鹿短期大学紀要 35, 15-24.
- 曹 陽 (2006):「アンケート調査による性心理と性行動との関係のモデル構築:問題と目的」, 『PG Lab Discussion Paper Series』No.4, 1-20.
- 鹿間久美子 (2008):「わが国における性教育の振り子論ー第二次世界大戦以降を中心にしてー」, 『思春期学雑誌』, Vol26, No3, 350-359.
- 「健やか親子21」最終評価報告書平成25年11月
<http://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-11901000-Koyoukintoujidoukateikyoku-Soumuka> 2016.9.11
閲覧
- 田代美代子 (2006):『性教育のあり方, 展望日本と世界, つながりひろがる』, “人間と性”教育研究協議会編, 大月書店.
- 高橋かん奈, 諸富祥彦編集 (2007):『教師が使えるカウンセリング』, ぎょうせい
- 槌谷亜希子, 篠木絵理, 藤井可苗 (2009): 高校生の性と性教育に対する教員の意識, 北海道医療大学看護福祉学部紀要, 16, 69-73.
- 上田邦枝 (2008):「思春期の性心理と健康教育プログラムの構築」, 『医学と生物学』, Vol.152, No5, 155-166.
- 渡会睦子 (2003):「小・中・高等学校における性の実態と教職にみる性教育の現況」, 『日本性科学会雑誌』, Vol.21, No 1, 39-45.
- 山本信弘 (1991): 性教育の歴史的変遷の文献的一考察, 『大阪教育大学紀要』, 39 (2), 203-215.
- 柳園順子, 石川満佐育 (2014): 女子大学生対象の「生と性の講演会」実施からみた性教育への提案ー10年間のアンケート調査の結果からー, 鹿児島県立短期大学紀要, 第65号, 33-48.